# 馬耳東風

不景気である．学生の就職が決まらない．こんな日本をあざ笑うかのように中国が元気である．日本の観光地は中国人に席巻され，繁華街には中国語が氾濫し，北海道を中心として水源を含む原野が中国人に次々と買い占められている．30年ほど前の日本は，世界一の金持ち国と言われ，一方でウサギ小屋に住むエコノミックアニマルとか，めがねをかけてカメラをぶら下げていれば日本人だとか揶揄されながらも，われわれは先を競うように海外へ，海外へと観光旅行に出かけ，海外の不動産を買い漁ったものだが，その姿は今や中国人に置き換わっている．誤解しないでいただきたいが，昔はよかったなどと言おうとしているのではない．渦中にいる己の姿を客観的に見るのは難しいが，渦から離れて渦をみるとよくわかるものである．

わが国は第2次世界大戦に敗戦したあと米軍に占領されたが，あの占領下，日本人は誰しも米国の豊かさに圧倒されてしまった．これでは戦争に負けるのは当たり前だと．それからの日本は米国賛美へと急傾斜し，あらゆる面で米国を手本としてきた．そして敗戦後20数年にしてGDP（Gross Domestic Product国民総生産）が米国に次いで世界第2位になるという驚異的に急速な経済成長を遂げてきた．しかし1990年代はじめに不動産バブルがはじけたのを契機に長期低迷に陥り，今日に至っている．低迷期に入っても米国追随は変わらず，「大きいことはいいことだ」と企業は吸収合併を重ね，市場原理，競争原理の名のもと，日本が世界に誇れる企業倫理であった終身雇用制度をアッサリと捨て去り，従業員は使い捨ての一歯車と化してしまった．またコストダウンを大義名分に，下請け企業の圧迫や生産拠点の海外移転が常態化してしまった．敗戦後のこのような大きな流れの中で，必然的にわれわれの価値観は変化し，「武士は食わねど高楊枝」といった思想はなくなり，経済至上主義一辺倒となったしまった．経済至上主義といえば聞こえはいいが，お金がすべてという拝金主義に他ならない．かつての日本人がもっとも唾棄した生き方ではなかったか．「禍転じて福となす」ではないが，不況にあえいでいる今こそ，敗戦から今日にいたるまでのわが国の歩みを顧みる絶好の機会ではないだろうか．

先頃の事業仕分けで，科学分野のある事業に関して「世界で1番ではなく2番ではいけないのですか？」という質問が出たそうであるが，経済に関しては2番でなくても3番でなくてもいいと私は考えている．それよりはかつての私たちが持っていて，経済発展とともに失ってしまった日本人の品格や美徳をもう一度取り戻せないだろうかと願っている．藤原正彦氏が「国家の品格」という本を出すまで，わが国は「品」という言葉を失っていたのではないかと思う．その後ほどなくある女性が「女性の品格」という本を臆面もなく出したことにそのことは象徴されている．

私事だが結婚のお祝いにといただいたワイングラスを傾けるたびに，グラスをくださった方を思い出すが，お祝いに「好きなモノを買って」とお金を頂戴したのではこういうことはないだろう．また私が子供の頃，お祝いに現金を包むのは米国流で合理的かもしれないが下品だと親が話していたのを記憶している．結婚祝いに「品」というのは大袈裟で，遠慮したい合理主義とでもいった方が適切かもしれないが，不況にあえいでいる今こそ，これからのわれわれの行動規範についてジックリ考えたいと思う．

（久）